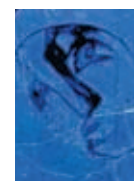


Section 4

住宅は、家族の神殿、
生活の宝石箱

染谷正弘 = 写真・文



ル・コルビュジェが提唱した近代都市計画や建築論をクローズアップしたこのコーナー。連載最終回は、彼が設計した宗教建築を通して、『輝く都市』の真意を読み解きます。



聖なる丘のロンシャン礼拝堂

ル・コルビュジェ

いにしえより「高貴な地」と呼ばれる聖地だったロンシャンの丘、古代には太陽崇拝の神殿が建っていたという。キリスト教の巡礼地となったのは12世紀以後である。聖母マリアに祈りを捧げる年2回のミサには、約12000人の巡礼者がこの丘を埋め尽くす。その時、ロンシャン礼拝堂は、天空の祭壇に姿を変える

神 と対峙し、自らを見つめ、自らの生き方を律する聖なる祈りの空間、それが宗教建築だ。聖なる建築に対し俗なる建築が住宅である。20世紀前半、近代社会にふさわしい住宅や都市を提唱し、それを『輝く都市』と呼び、世界中の建築家に多大な影響を与えたル・コルビュジェ。俗なる建築の革命家となった彼は、生涯に三つの聖なる建築を設計している。

その一つが、フランスはスイス国境に近い田舎町に建つロンシャン礼拝堂だ。小高い丘に聳えるその外観は、いままで誰も見たことのない巨大な生命体のようであり、訪れる者の想像力をかきたてずにはおかない。礼拝堂内は、厚い壁に穿たれたたくさんの窓の大小から燦々と降り注ぐ神々しい光に満ち、それは息をのむほどに美しい。

ロンシャン礼拝堂は、大地が隆起してできた建築の原初的な姿のようにも見える。実際、壁の一部は、丘の土になりかけた旧礼拝堂の残骸で築かれたという。白く塗られたその不整形な壁の上には、打ち放しコンクリートの巨塊が覆いかぶさるように載り、それはまるで大きな藁葺き屋根のようでもある。窓は、むしろ穴と言ったほうがふさわしい。ル・コルビュジェは、この建築について、「装飾ゼロの芸術品をつくった」と

自然と建築が奏でる空間の音響学

貝殻や動物の骨などの自然の形を愛したル・コルビュジェは、それを自らのデザインの源泉としていた。自然の形への探求、つまり大地や風景と響き合う建築への探求が、空間の音響学だと彼はいう。



ロンシャン礼拝堂(1955年)

聖母マリアへ祈りを捧げるための礼拝堂。「人工的な装飾は何もない、十字架は意味のある場所だけに置いた」とル・コルビュジェはいう。裸形の建築、ここには聖なる光だけがある



ラ・トゥーレット修道院(1959年)

ドミニコ会の神学生のための修道院。外観(上)に整然と並ぶ四角い開口群は、独り瞑想するための備房である。大地と一体化した階段上の小礼拝堂(下)は、天から光が降り注ぎ、コンクリートの洞窟のような



自然の光、聖なる光、光の建築へ

ル・コルビュジェがデザインしたカラフルなステンドグラスがめ込まれた矢狭間(やざま)のような窓群。そこから降り注ぐ光は白壁に溶け入り、建築空間は光へと昇華していく



そめや・まさひろ / 建築家・文化女子大学講師・DSA住環境研究室代表。「コミュニティデザイン」という計画概念の基に大規模集合住宅のデザインプロデュースを多く手掛ける。作品にシテイア(千葉県我孫子市)リボンシティ・レジデンス(埼玉県川口市)大宮ファーストプレイスタワー(埼玉県さいたま市)等

自然の摂理、それがル・コルビュジェにとって唯一の神だったように思う。人間もまた自然の一部である。「住宅は住むための機械である」とは彼の有名な言葉だが、「住宅は家族の神殿だ」とも彼は言う。住宅という俗なる建築を聖なる建築へと導く20世紀を生きた人々へのマニユフエストが、ル・コルビュジェの『輝く都市』だった。彼は、「住宅は生活の宝石箱、幸せをつくる機械だ」とも言う。21世紀を生きた私たちの住宅や都市は、いま輝いているだろうか。